付篇Ⅱ

山口市内採集の縄文時代草創期石斧

小南　裕一

1　はじめに

ここで紹介する資料は、大畠富登氏が山口市内で工事中に偶然発見されたものである。大畠氏は市内の建設会社に勤務されており、遺跡の表土除去業務を通して面識があった村田裕一氏を介して平成11年2月に資料を山口大学埋蔵文化財資料館に寄贈され、調査と保管を依頼された。筆者は以前、資料館でこの資料を実見し、その特異性について村田氏と検討することがあったが、このたび資料紹介の機会を得ることができた。なお、資料は山口市大内長野で水田の造成工事中に採集されたとのことである。

2　資料の観察

資料は長さ17.9cm、幅8.1cm、厚さ2.9cm、重量586.7gを測る石斧である。石質はサヌカイトで、形態は平面形が幅広で短冊形、断面はレンズ状に近く扁平である。縦長の大型剥片を素材としており、裏面に主要剥離面が認められる。大まかな成形剥離の後、側縁部を中心に調整剥離を施し、右側縁に敲打を加える。正面ほぼ中央部に自然面もしくは節理面と考えられる部分があるが、風化が著しくいずれとも判断しがたい。刃部は両刃で、両面ともに研磨されているが、研磨方向は明確ではない。

3　資料の位置づけ

本資料は、形態・石質等から一般的な縄文時代の石斧とは異なり、その評価が問題となるが、刃部のみが研磨されていること、風化が著しいことなどから、縄文時代草創期のいわゆる神子柴系石斧である可能性が高い。山口県内では宇部市前田遺跡で神子柴系石斧が出土しているが、前田例は、平面形が長楕円形で断面形はやや厚めの三角形状を呈しており、本資料とは形態が異なる。しかし神子柴系石斧にはバリエーションがあり、本例のように平面形が幅広でレンズ状の断面形を呈するタイプも存在し、とりわけ四国地方西部に濃密に分布しているようである。また山口県内では、宇部台地上に位置する長桝、南方、

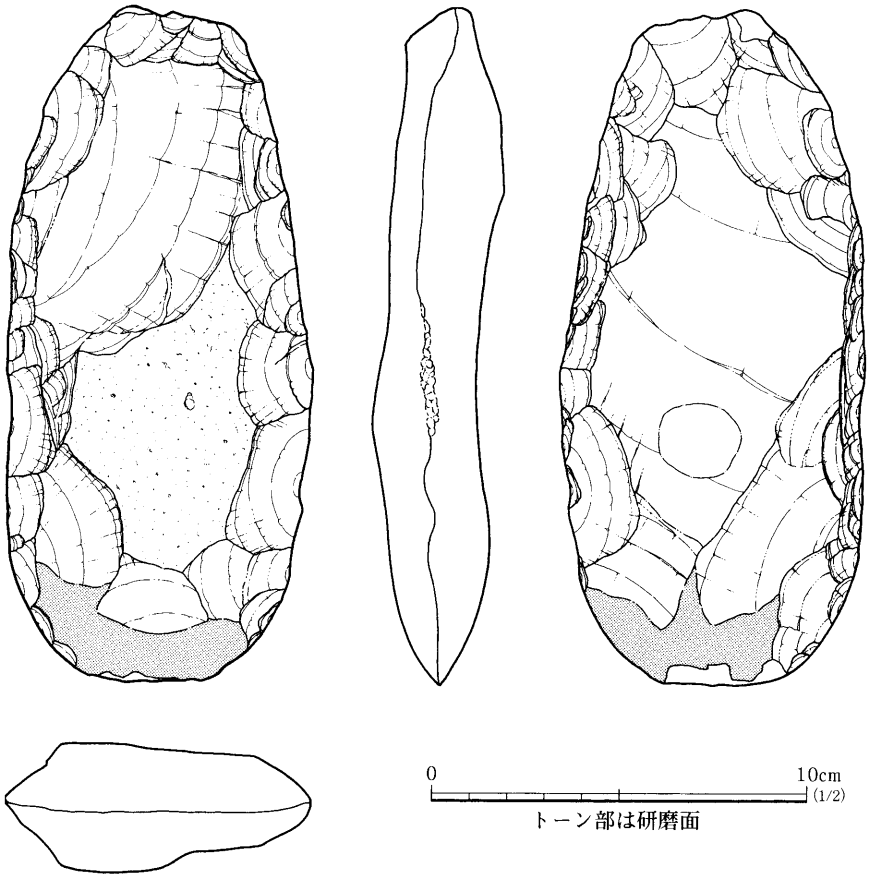
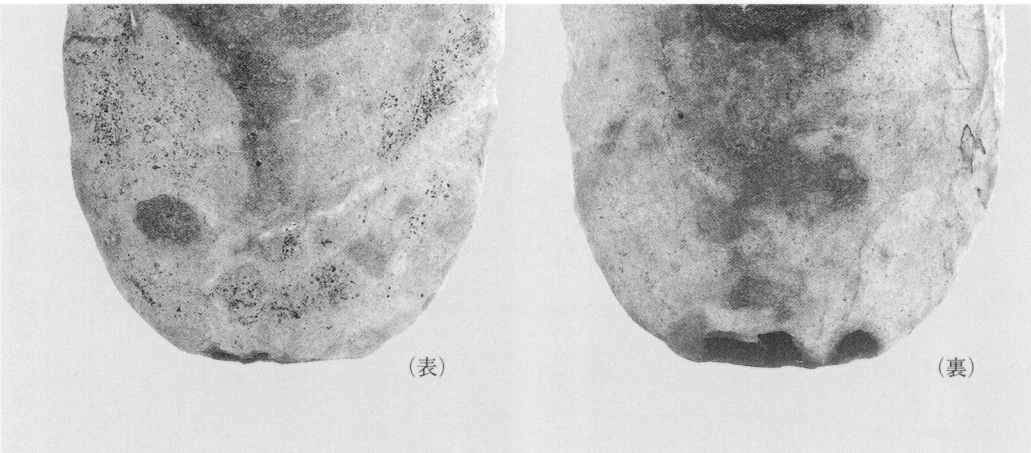


Fig.131　縄文時代草創期石斧実測図

岩上、藤尾ほかの各遺跡で細石核・細石刃が一定量出土しており、このうち藤尾遺跡では縄文時代草創期に位置付けられる船野型細石核が主体を占める。船野型細石核＋神子柴系石斧という組み合わせは大分県犬飼町市ノ久保遺跡等で確認されており、今後県内でも同様の組み合わせが検出される可能性がある。

山口県における縄文草創期関連の遺物は極めて少ない状況下で、今回紹介した資料の持つ意義は大きい。発掘調査による今後の資料増加も期待されるが、既報告資料の再検討も積極的に進めていくべきであろう。なお、本文執筆にあたり、発見者である大畠氏、資料を収蔵する山口大学埋蔵文化財資料館の諸氏、並びに杉原敏之氏、平ノ内幸治氏、吉留秀敏氏には多大なご教示・ご協力を賜った。文末ではあるが感謝の意を表したい。また参考文献の記載は、紙数の都合上省略した。ご容赦願いたい。

縄文時代草創期の石斧（山口市内採集）



縄文時代草創期の石斧（刃部拡大）